

論外鷗森滴点

著者 泉 長谷川

明治書院

点滴森鷗外論

定価 4,500 円(本体 4,369 円)

平成 2 年10月25日 発行

著 者 長 谷 川 泉

113 東京都文京区西片1-1-11

発行者 株式 明 治 書 院
会 社

代表者 三樹 彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中 忠

発行所 株式 明 治 書 院
会 社

東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号101
電話(03)292-3741(代) 振替口座東京3-4991

©Izumi Hasegawa 1990 ISBN4-625-43061-5 製本 正文社

序

本書は、私の森鷗外に関する十二冊めの著である。

すなわち、既刊の「写真作家伝叢書」の一冊としての「森鷗外」や、「森鷗外論考」正・続、同増補版、「鷗外『キタ・セクスアリス』考」正・続、「鷗外文学の位相」「鷗外文学の機構」「鷗外文学の側溝」「鷗外文学の涓滴」「鷗外文学管窺」の十一著に継ぐものである。

上記の題名から察せられるように、巨視的、総論的鷗外論から、しだいに「側溝」「涓滴」「管窺」のように、側面的鷗外論の領域に派生して行く傾向がある。本書一書の構成は、全体としては総論的な全体像から部分的なものに傾いて行くことを免れない。

本書の血流の中では、「Ⅲ」の日独文化交流に関する部分、「Ⅳ」の追悼記、「Ⅴ」の書評の類は、性格がはっきりしている。追悼記や書評の類は、このようにして集めてみると、対象となった人物像や図書に寄りかかっている点が多い。性質上、そうなるのは自然の帰結である。そして、鷗外を擦過しているだけの内容や、目が過去に釘づけになっているのもやむを得ないと思うが、その時々々の歴史の歯車を感じさせるものがあると、自らを諒

恕する思いが強い。

本書の題名を、「点滴森鷗外論」と命名した意味を、自解しておく。「点滴」によって救われる生命もあれば、生命末期の通過儀礼としての「点滴」もある。そのいずれが適応するかは、著者自身が筆に上すべきではなからうと思う。

平成二年四月

長谷川 泉

目 次

I

作家論・作品論の彼岸	3
近代文学にすくて見える家族模様	40
近代文学における批評意識	53
作品論と作家論	81
都市性	96
「舞姫」太田豊太郎のモデル「武嶋務」資料の受贈	115

II

一葉における女性の化粧	141
川端康成「伊豆の踊子」の装幀	144
「三四郎」と「雁」	147
破落戸の心理地図	151
「高瀬舟」の周辺	154

新しい人間類型の世紀への理解を……………	156
心に染みた夷隅・日在の風趣……………	158
日本文学ラヴ・コール……………	159

III

森鷗外が結ぶ日独文化交流……………	165
海外最初の鷗外展……………	170
西ベルリンの展示会に八千人……………	177
海外での二つの鷗外展の意義……………	179
森鷗外展と日独交流……………	181
西独での二つの鷗外展……………	183
「舞姫」映画化、西独で発表……………	188
東ベルリンで五月に鷗外展……………	190
鷗外「舞姫」の映画化順調……………	191
森鷗外記念館の建物にフンボルト大学日本学科が移転……………	193
ツアーへの誘い……………	196

IV

成瀬正勝氏を悼む	201
「以文会友」の実―川端康成没後五周年に―	204
アイバン・モリス氏を悼む	207
平野謙の思い出	211
Drachen 熊沢龍―含羞の底の強靱を偲ぶ	215
久松潜一先生を偲ぶ	217
川副国基さんを悼む	223
吉田精一氏を悼む	230
野田宇太郎さんを悼む	232
瀬沼茂樹氏を悼む	237

V

「岩波講座日本文学史」の完結	241
増淵恒吉・石丸久校訂・注釈・解説「近代評論」近代文学注釈大系	244
岩波版第二次「鷗外全集」	246

高田瑞穂著「近代耽美派」	250
江藤淳著「漱石とその時代」	252
瀬沼茂樹著「仮面と素面」	258
越智治雄著「明治大正の劇文学 日本近代戯曲史への試み」	261
亀井俊介著「ナシヨナリズムの文学 明治の精神の探求」	264
日本近代文学館編集・複刻「『新潮』作家論集」	266
三枝康高著「森鷗外 その詩と人生観」	270
瀬沼茂樹著「展望・現代日本文学」	273
「西周全集」の完結	276
伊藤整著「日本文壇史」全十八巻の完結	281
野島秀勝著「『誠実』の逆説 近代日本文学とエゴ」	284
野田宇太郎著「明治村物語」	287
平岡敏夫著「日本近代文学の出發」	290
熊坂敦子著「夏目漱石の研究」	293
佐伯彰一著「日本人の自伝」江藤淳著「海舟余波」	296
加藤周一「三題噺」の巧緻	301
「鷗外全集」(岩波版第三次)全三十八巻の完結	303

江藤淳著「漱石とアーサー王伝説」	305
木下秀一郎著「百鬼老先生」わが写生風土記 漱石	307
森鷗外「東京方眼図」	309
「芥川龍之介全集」全十二巻に寄せて	312
猪野謙二著「日本文学の遠近」Ⅰ・Ⅱ	317
千葉宣一著「現代文学の比較文学的研究—モダニズムの史的動態—」	319
福本彰著「苦悩と孤寂への測鉛—近代日本文芸への彷徨—」	326
花袋研究会編「愛と苦悩の人・田山花袋」	328
武田勝彦著「立原正秋伝」	330
「講座 夏目漱石」第一巻「漱石の人と周辺」	334
「川端全集」の「未刊行作品(二)」第二十一巻に寄せて	337
吉野俊彦著「虚無からの脱出—森鷗外」	341
佐渡谷重信著「三島由紀夫における西洋」	343
篠弘著「近代短歌論争史」(「明治大正篇」「昭和篇」)	346
巖谷大四著「文壇ものしり帖」	355
紅野敏郎著「昭和文学の水脈」	358
竹盛天雄著「鷗外 その紋様」	360

今井源衛校訂 依田学海 「墨水別墅雜錄」	363
昭和女子大学近代文学研究室 「近代文学研究叢書」 第六十卷	366
フランソア・サルダ著／森岡恭彦訳 「生きる権利と死ぬ権利」	370
武田勝彦・田中康子著 「銀座は緑なりき」	373
稲垣達郎著 「松前の風」	375
兵藤正之助著 「川端康成論」	378
中村真一郎著 「火の山の物語―わが回想の軽井沢」	386
紅野敏郎著 「近代日本文学誌 本・人・出版社」	389
田中隆尚著 「へらす宵宴」 上・下	396

VI

現代の詩と言語論	403
長谷川泉略歴	413
長谷川泉著作目録	419

I

作家論・作品論の彼岸

一、「作者」と「作品」

「作者」と「作品」は、縦・横二重の規制を受けて、「文学史」を構成する。その意味は、簡単ではないが、柔軟にほぐしてみると、大要、次のようになるであろう。

「作者」だけを列挙してみても、「文学史」の、史的把握は十全ではない。

また「作品」だけを列挙してみても、「文学史」の、史的把握は十全ではない。

したがって、「作者」と「作品」とは、濃密にからみ合って、「文学史」の、史的把握は十全となる。世に、「文学史年表」なるものがある。その形態を考えると、大概是、時代別、あるいはジャンル別、それも相関性をもって構成されている。一、二の、各自の便利と思う「文学史年表」を開いてみれば、そのことは容易に納得されると思う。

以上は、極めてラフなスケッチである。こまかに見れば、上述のような整理にいたるまでも、かなり大きな問題がある。ジャンルの方は、比較的問題が少ないと思うが、土居光知のジャンル隆退説や、土居説を全くすなおに是認するか、懷疑的に洗い直してみるか、などによって、いろいろ問題は出てくることも予想される。

時代別の方は、極めて問題含みである。「文学史」の構成者は、「文学史」における時代区分について、一応の定見を持つ者が多いとは思うが、よく考えてみると、その立脚点そのものが、既成概念の借りものであったり、いちおうの便宜的なものであったりする。そして、更に厳しい目を向けるならば、文学に、そのような、文学固有の時代区分を認めない者も出てくるだろう。そうなると、「文学史年表」なるものは、解体されて、百鬼夜行の曼陀羅となってしまう。世に「文芸思潮」や「文芸思潮論」なる、便利な言葉はあるが、巨視的な、そのような整理体系と、個々の「作者」なり「作品」は、いったい本質的に、どのようにかわるのか、懷疑は、更に懷疑を触発して止まるところを知らない、無政府状態に陥りかねない。

二、「読者」の契機

ひと頃騒がれたヤウスの「挑発」は、文学に「読者」の契機を強く導入したことであった。文学が「作者」「作品」にかかわることは、とくに異を称える者を問題にしなくてもよいと思われるが、そこ

に実はひそんでいた「読者」なるものを顕在させてくると、かなりややこしいことになる。

そのしくみは、「作者」も「作品」も、「読者」あつてのもの、「読者」の評価によって存立が認められてくるからである。ヘルダーリンの「ヒューペリオン」も、森鷗外の「淡江抽斎」も、「作者」それ自身という擬似「読者」によって、「作品」の、そしてそれに何らかの意味で関連した「作者」の価値存在が主張されても、その声が「価値」として響くためには、「読者」にかかわる存在が、より客観的に必要となるからである。

川端康成が、日本人最初のノーベル文学賞を与えられたときに、失礼なジャーナリストによって、川端自身が、すなわち「作者」そのものに、その価値を問われたことがあった。その折の「作者」それ自身、一種の擬似「読者」は、その解答は百年後の評価にまつことを述べていた。そのことを思い起こすと、この応答は、本質的に、「読者」の契機にかかわることである。「作者」は、自作にかけた——要するに「作品」にかかわる価値の深淵に、常に臨んでいるものであろう。

新潮社が設けた文学賞三島由紀夫賞の第一回に、高橋源一郎の「優雅で感傷的な日本野球」が選ばれた。この時の選考委員は江藤淳・大江健三郎・筒井康隆・中上健次・宮本輝であった。そして六月二十四日の授賞式における選評は、江藤淳が述べた。江藤淳は「優雅で感傷的な日本野球」が、メタ・ノベルであることを骨格として、小説における言葉の根幹に触れ、題名をパラフレーズした「優雅」「感傷的」「日本野球」の言葉と意味内包を要領よく解説してみた。「選考委員」という、特別な「読者」が、どれだけ時間をかけて議論をし、授賞「作品」を決定したかというエピソードにも触

れた。小説と違って、言語芸術以外の領域になると、問題はもっと複雑になる。当日の「日本芸術大賞」の受賞者は、ローマで二十年の海外の享受者を対象に芸術活動を行っている「暖い日本の生命観に明快かつ普遍的な表現を与えた業績」に授賞された高橋秀^{しゅう}であった。選考委員は井上靖・大岡信・高山辰雄・中村真一郎であった。選考委員代表として、選評を述べたのは中村真一郎であったが、享受者に受容・享受を保証する客観的表現の問題に触れていた。客観的表現とは言っても、小説の場合にくらべて、いかに「作者」の主張と、受容者・享受者との間に、ギャップが生じることか。

その空隙を埋めようとして、「作者」（創作主体）は、自作自解を試みることがある。あるいは、一受容者・享受者としての批評家が、他の受容者・享受者の共感を得ようとして、解説や批評をあえてすることになる。小説とても、文学作品とても同様である。三島由紀夫の「瀨王のテラス」の自解のときがそうである。戯曲「瀨王のテラス」の「読者」が「作者」三島由紀夫の自解なくして、「作者」三島由紀夫と同じレベルの享受・鑑賞をなし得るかどうかは、疑問である。森鷗外の歴史小説における「作品」と「縁起」との関係は、三島由紀夫ほどの読みを解く鍵とは言えなからうが、とにかく「作品」解扉の鍵であることは疑えない。川端康成の「独影自命」も、志賀直哉の小説「暗夜行路」における「創作余談」「続創作余談」とも同様であろう。志賀直哉の場合は、小林秀雄の「読者」としての「作品」の読み方を是認して、「作者」の創作意図とは乖離した、全く相違する受け取り方（恋愛小説、「読者」の受容のしかたを逆用して、「作品」の幅として肯定してしまっている。川端康成の「独影自命」は、「作者」が自分の「作品」を自解することは、自作の生命を扼殺するとし